

豊明希望チャペル礼拝

2022/5/22

ローマ人への手紙 5:6~8

「私たちがまだ罪人であったとき」

短い箇所ですので、もう一度お読みします。

「5:6 実にキリストは、私たちがまだ弱かったころ、定められた時に、不敬虔な者たちのために死んでくださいました。5:7 正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません。

5:8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」

愛されるはずのない者が、愛されることの素晴らしさ。

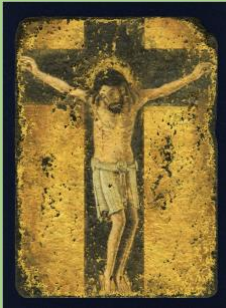
ここには、そのことが書かれています。

また、神は、その愛されるはずのない者のために、その命をかけてくださった、死んで下さったというのです。

この箇所パウロは、人類史上、そんな例を、人間の中では、歴史上、見たことも聞いたこともない、それが神の愛だと言います。すなわち、それは、唯一無二のものだ、神の愛は唯一無二の愛だと。

今一度、この言葉を確認して下さい。

「5:7 正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません。5:8 しかし、私たちがまだ罪人であっ



たとき、キリストが私たちのために死なれた・・・」

先日、私の絵描きの友人が、田舎でギャラリーを建築され、ご自身の作品を展示する、そのお披露目があったので、見に行ってきました。(←の絵は、彼の書いた作品の一つです。)すでに多くの人たちが入れ替わりで訪れていました。忙しい中で、ご挨拶すると、彼は、彼のお兄様に私を紹介されて、「彼は、私の友人、いえ、親友です。」と、紹介されました。お兄様も作家で、一つ小さいアクセサリーを求めたら、「あなたからは、この金額しかもらえません。」と、言われ、ダメだ定価で買うと一悶着(ひともんちゃく)があったあと、ありがたく、値引き金額でいただいてまいりました。

愛されていると言うことは、こういうことだと思います。私も彼のことを親友

だと思っているのですから、そのことばは本当に嬉しい言葉でした。

しかし、彼は、私のために死んでくれるでしょうか、万が一、危急の時に、そのようなことが起きないとはかぎりません・・・いいえ、やはりないのです。私は、おそらく、彼のために死ぬません。まして、親友同士でもそうであったとすれば、憎い敵だったらどうでしょうか。倍の値段で売ってやろうかしら、いいえ、あなたには、売りたいくもないし、買いたくもないと思うかも知れません。

このローマへの手紙のパウロは、しかしキリストは、「5:7 正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかも知れません。5:8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれた・・・」

と言うのです。

・・・何度も言いますが、私たちが罪人であったとき、その私たちのために死んで下さった方がいる・・・パウロは、私たちに問うているのです。これをどのくらいすごい事だと思ってる？と。

今日の箇所を、もう一度、6節から聞いていきましょう。冒頭の6節のキリストの希有な事、その内容は、ほぼ同じ内容で、8節で繰り返され、7節の「正しい人のためなら死ぬ人がいるかもしれない」という比較を挟んでいます。

並べてみましょう。

「5:6 実にキリストは、私たちがまだ弱かったころ、定められた時に、不敬虔な者たちのために死んでくださいました。」

「5:8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」

6節で、「私たちがまだ弱かったとき」というのは、このように並行させてみると、信仰のことだとわかります。すなわち、私たちが神から離れていて、神を求めすることもせず、神を求めることに、わずかな興味も抱いていない、信仰的な意味で「弱かった」と言っているということです。それは、8節で言う「罪人」ということですが、さらに言えば、私たちから神に近づく情熱も、ほんのちょっとの信仰も持ち合わせていないと言う意味です。信仰がない状態を指しているということです。

皆さんの多くは、キリスト教と関係のないところで生きてきた人たちだと思えます。しかし、「私たちがまだ弱かったとき」すなわち未信者であった、信仰がなかった者のために、死んで下さったというのです。いえ、たとえ、クリスチャンホームに育った人であっても、神を知らなかった時があったはずです。いずれにしても、聞いてはいたけれど、そういう意味だったのかと、その救いの意味の重さを、洗礼の準備や、何かの説教を聞いてなのか、御霊に示されて、後のあるときに、悟ったのだと思えます。

宗教改革者カルヴァンは、人が救われていく過程を、このように説明します。

それは、悔い改めの前に、贖罪があるのだということです。

<4つの法則>

聖書の救いについて説明する「4つの法則」は、聞いた事がある人がいるかもし

れません。

神→罪→救い→イエス・キリスト

この説明をするとき、ここにある順番にも見られるように、罪→救いと、罪をまずは理解し、悔い改めて、救われるという順番であると説明するのだと思います。

カルヴァンの時代にもそのように解釈されていました。しかし、カルヴァンはそうではないのではないかと言うのです。

実際、私たちに起きている救いは、救われてから罪を悟るということだということです。どういうことかという、本来、罪人が、その罪を悟ることなど出来ないのだということです。ある意味で正しい言い方です。私たちがどんなに、自分の罪を理解しようとしても、神から見たとき、その罪の認識は、いずれも不十分なのです。私たちが、「ああ、幼い日、隣の家の柿をとって食べました。」と言う時、神さまは、「そうです。しかし、それは、ほんの一部です。」と言われるのです。「あ、友人を裏切りました。」「ほんの一部です。」「あ、言いたくないのですが、今、私の心の中に浮かんでいます、人に言えない罪を犯しています。あなたはご存じの通りです。」と言えば、神さまは、「それでもないです。」とおっしゃられるのです。

なぜなら、私たちの罪は、エデンの園を出てから始まっているからです。エデンの園から出てからは、日々、生きる事が罪なのです。エデンの園では、日々が、神を身近に感じ、裸でも、人間同志、お互いが恥ずかしくないほど、あけぴろげで、人と人との関係が良好でした。エデンの園から出て、前を葉っぱで隠し、服を着たとたんに、それは、すでに罪人の生き方を日々しているのです。

人は、イエス様の愛を知って、こんな愛されているのはなぜなのだろうと、救われてから気づくのです。神の愛を日々、気づくのです。そうして、はじめて、こんなにも愛されなければならない理由を悟るのです。すなわち、私たちが赦され愛されなければならない罪を、日々、気づかされて生きていくのです。

ですから、悔い改めは一生なのです。このように、愛されている事を見いだす度に、悔い改めるのです。

<カルヴァンの救済論>

すなわち、カルヴァンの言うとおり、**罪→悔い改め→救いではなく、救い→罪の悔い改め**なのです。

7節の「5:7 正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません。」で、パウロは、この世にあっても、「善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません」と、命がけの愛があると言います。しかし、それと比較して、それにもまさる神の愛がこれだと言うのです。

6節と8節で繰り返されているわけですが、罪人の為すすんでイエス様は死なれたと言うことです。

まさにその愛は、Ⅱコリント9:15「ことばに表せないほどの賜物（恵み）」であります。それは、唯一無二の神の業なのです。「ことばには表せない」すなわち、人間の論理では解説不可能、人間の想像力では、その想像をはるかに

超えた愛だということです。

もういちど、8節を見ますが・・・

「5:8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」

「私たちがまだ罪人であったとき」罪人。罪は、ギリシャ語で、ハマルティア、すなわちの外れという意味です。的外れな生き方と考え方は自分を苦しめます。劣等感という問題を考えてみましょうか。多くの方は劣等感で苦しんでいます。私は信仰を持って、劣等感に、以前ほどは、苦しまなくなりました。それは、「的外れ」な見方を自分にしなくなったからだと思います。罪人である自分をキリストの救いによって、同時に、認めるというか、受け入れる事ができたからです。私が、できが悪いというのは、当たり前だと思えるようになったからです。このように人の考えはいつも「ハマルティア」的外れです。人は、人との比較で生きています。人より下なら劣等感、上なら優越感が出てきますが、その比較が、たいていはまちがっているのです。多くの場合、上だと思っています。あの人に比べれば、そこまでひどい罪人でないと。しかし、過大評価は疲れるのです。過大な期待をおわされて(あるいは、期待されていると勘違いして)、それに応えようと背伸びして疲れてしまうのです。じゃあ、過小評価がいいかという、それもまたダメです。自分はダメなんだと落ち込み、あるいは、世の中を怨むようになり、怒りがわいてくるからです。神に愛されていることを知る信仰者は過大評価からも自由ですし、過小評価からも自由なはずです。

両足と片手を切断し指 3 本しか残されず、何もできないと考えていた田原米子さんは、神様の愛にふれた時に、しっかりと、3本の指を見つめました。そして、三本しかないことと、三本もある事に目覚めました。姉妹の講演を聞いたことがあります、みなさん、この3本の指で、何でも出来るんです。子育てもしました。歯も磨けます。歯磨き粉のフタを空けるのは大変でしたが、今は、くるくと回すフタでなくて、パコンとはずれるフタが出来て、それも解決しました。そう、私たちの前で、歯磨き粉のフタを空けるのを実践してくれました。指が 3 本しかないと考えて、劣等感に陥るか、指が 3 本もあると考え、できたことを感謝するかでこんなに大きな違いがあるのかと、その素晴らしい笑顔の米子さんに感動していました。

ハマルティア、的外れの考えから、的外を外さないで、自分を正しく再評価して感謝に変わった例です。「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださった」十字架で贖いの死を遂(と)げて下さったと知った人の考え方です。

愛は人を生かします。真に生かします。愛こそ人を生かすのです。

「5:8・・・私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださった・・・(このようにして)神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」

みなさん。何度もこのみことばをかみしめて下さい。みなさんの頭に、心に刻

みつけて欲しいのです。

そして、人々にも、この愛を伝え続けていきたいのです。たとえ、聞いて下さらなくても、伝え続けていきたいのです。私たちもその、神の一方的な愛、人知を越えた愛によって気づかされ救われたのですから。

この週、私たちに対するご自身の愛を深く心に覚えながら歩む歩みでありたいと願います。祈ります。